

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：26201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K11635

研究課題名(和文) 再発・転移したがんサバイバーのストレングスモデルを基盤とする看護援助方法の開発

研究課題名(英文) Development of nursing method based on the strength model of cancer survivor with recurrence / metastasis

研究代表者

岩本 真紀 (iwamoto, maki)

香川県立保健医療大学・保健医療学部・講師

研究者番号：80314920

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、再発または転移を経験したがんサバイバーのストレングスを基盤とした看護援助方法を開発することである。

再発または転移を経験したがんサバイバーのストレングスは、【正しい病状認識】【がんとともに生きる構え】【後悔のない最期に向かう構え】【生き方を左右する価値観】【厳しい現状を預けられる存在】【前に進む上での強み】であり、『最期まで自分らしく生きるための力』であることが明らかになった。このようなストレングスを、引き出し、活用し、支える支援が必要であった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop a nursing support method based on strength of recurrent or metastatic cancer survivor.

The strength of recurrence or metastasis cancer survivor is [correct awareness of the condition] [stance to live with cancer] [stance towards the end without regret] [values that affect life style] and [Presence that can leave a tough situation]. And It became clear that it is "the power to live themselves until the end". We needed support to bring out, utilize and support such strength.

研究分野：がん看護学

キーワード：再発・転移 がんサバイバー スtrenグス

1. 研究開始当初の背景

がんによる死因は、1981 年以来日本人の死因の第 1 位を占め、がんへの罹患は多くの人にとって脅威として受け止められているが、医療の進歩とともにがんの治癒率や生存率は増加している。そのため、がんは不治の病ではなく、がんをコントロールし、有意義な生活や人生が送れるようにするという考えが重要視され(今泉ら, 2009)、がんと診断された時から人生の最期までがん生存者であり続けるというサバイバーシップの概念が導入され、浸透している(藤田, 2003)。

再発や転移を経験したがんサバイバーは、人生の終わりが確実に来ることを突きつけられ、残されている人生の時間の認識に変化が起こり、生きる気力が低下するほどエネルギーが低下している(田中, 2012)。また、肝、骨、脳などの転移に伴う身体的症状により、予後や死についての不安を一層強め、希望を見いだしにくい。このように、がんサバイバーは、身体的、精神的、社会的、実存的な苦悩を抱えているが、その苦悩を乗り越え、自分らしく、たくましく、豊かに最期まで自分の人生を生き抜くことが望まれる。そのためには、がんサバイバーが自分の力を最大限に発揮し、QOL を高めていけるような看護援助方法の開発が重要課題と考える。

がんサバイバーの持つ力に関する研究を概観(岩本, 2014)すると、がんサバイバーの持つ力は、がんへの罹患や治療による苦難に対処し、乗り越えることでがんと共にある新しい自分を獲得し生きていくための力といえる。がんサバイバーは、自分自身のあり様を見直し、現実を肯定的に受け止めることで、自分の持つ力を引き出していた。しかし、がんサバイバーの持つ力を支援する看護援助方法についての研究はまだまだ少なく、確立されているとは言

いがたい。

そこで、がんサバイバーの持つ力を支援する看護援助方法を開発する上で、ストレングスの概念を用いることができるのではないかと考えた。ストレングスは、誰でも、どのような状況にある人でも、まだ発見されていない無限の力があるという考えのもと、個人のもつ強みや力を尊重し、活かしていこうとするものである(Walter, 2009; Rapp ら, 2006; 森田, 2006)。つまり、ストレングスは、誰にでも無限に存在し、個人の価値観を反映し、前へ進もうとする動的な性質を有する概念であり、様々な苦悩を抱えるがんサバイバーに対して有用な概念といえる(岩本ら, 2013)。

社会福祉領域において開発されたストレングスモデルは、健康的で望みに満ちた生活の場を創り出すことをねらいとし、精神障害者のためのケースマネージメント(Rapp ら, 2006)において活用されている。高齢者のためのストレングスモデル(Fast ら, 2005)は、高齢者が成長し、自立できる大きな可能性を持っていることを前提として開発され、高齢者の経験、能力、意思などを継続的にチェックし、生活の質の向上に必要な援助を明確にできるものである。看護学領域においても、女性の内面的な強さ(inner strength)に関する研究(Lewis ら, 2012; Berit ら, 2011)が少しずつ進められており、患者の潜在能力に影響を与え、健康を維持、増進するための看護援助に役立てることが期待されている。しかし、その研究はまだまだ少ない状況である。

2. 研究の目的

再発や転移を経験したがんサイバーのストレングスを基盤とした看護援助方法を開発することである。

(1)再発や転移を経験したがんサバイバ

ーがストレングスを発揮して生きるプロセスを明らかにする。

(2)再発や転移したがんサバイバーのストレングスを基盤とする看護援助方法を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)再発や転移を経験したがんサバイバーのストレングスに関する面接調査

再発または転移を告げられ、外来化学療法を受けているがんサバイバーを対象に、インタビューガイドを用いて半構成的面接を実施した。対象には、研究の趣旨を説明し同意を得て実施した。また面接中は体調等を配慮して実施した。分析は、木下による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた。分析焦点者を「外来化学療法を受けている再発または転移を経験したがんサバイバー」とし、分析テーマを「再発や転移を告げられてから、どのようなストレングスを発揮し、どのように自分らしい生き方を見い出していくのか」と設定した。

(2)再発や転移を経験したがんサバイバーのストレングスを基盤とした看護援助に関する面接調査

がん看護専門看護師を対象に、再発や転移を経験したがんサバイバーのストレングスをどのように捉え、支援しているかについて、インタビューガイドを用いて、半構成的面接を実施した。対象者には、研究の趣旨を説明し同意を得て実施した。面接で得られたデータは、質的帰納的に分析した。データと解釈に矛盾はないか、解釈に飛躍はないかを研究者間で検討を重ね、真实性の確保に努めた。

4. 研究成果

(1)再発や転移を経験したがんサバイバ

ーがストレングスを発揮して生きるプロセスを明らかにする。

対象は15名であり、男性6名、女性9名であった。

再発や転移を経験したがんサバイバーのストレングスを発揮して生きるプロセスは、再発や転移による衝撃を【生き抜くための努力】によって緩和し、治療経過の中で【がんとともに生きる構えの獲得】や【後悔のない最期に向かう構えの獲得】により、これから生きる姿勢が獲得され、現状をふまえた上で【現実的な生き方の決断】をして、【折り合いをつけた生き方】を生きるプロセスであった。

がんサバイバーは、がんの再発あるいは転移を告げられることによって、大きな衝撃を受けるが、<生きるためのベストな治療を追求>し、<治療効果を上げるための取り組み>をすることによって、【生き抜くための努力】をし、治療を頑張ろうと気持ちを切りかえていた。【生き抜くための努力】を支えるストレングスは、【命を救ってくれる存在】であった。

治療を継続していく中で、完治が難しくなってきた現実から、<いつどうなるかわからない>という不確かさを感じ、治療効果の確認の度に、<検査結果に伴う揺らぎ>を経験していた。しかし、考えても仕方がないと<がんにとらわれない>ように心がけることで、【がんとともに生きる構えの獲得】がなされていた。【がんとともに生きる構えの獲得】を支えるストレングスは、【がんと向き合ってきた経験】であった。さらに、自分に残された時間はどのくらいだろうかと、<残された人生の推測>をし、自分の最期や死後について想像しながら、<死に向かう覚悟>をし、【後悔のない最期に向かう構えの獲得】をしていた。【後悔のない最期に向かう構えの獲得】を支えるストレングスは<死は自然の流れ>という死生観であった。

さらに、がんサバイバーは、がんや治療によって、これまでできていたことが徐々にできなくなっていることを実感することにより、<現在できることの見定め>を行っていた。そして、自らの現状を把握したうえで、<叶えることのできる望みを創出>し、【現実的な生き方の決断】をしていた。【現実的な生き方の決断】を支えるストレングスは【自分の生活を守る力】であった。自ら【現実的な生き方の決断】をすることによって、<後悔のない生き方>を心がけつつ、自分にとって<当たり前な生活>、<楽しみのある生活>を送っており、【折り合いをつけた生き方】をしていた。プロセス全体を支えるストレングスは、【前に進む上での強み】であった。

(2) 再発や転移したがんサバイバーのストレングスを基盤とする看護援助方法を明らかにする。

対象は8名であり、看護師の経験年数は11年~27年であった。また、がん看護専門看護師としての経験年数は、2年~13年であった。

がん専門看護師が捉える再発または転移を経験したがんサバイバーのストレングスは、【正しい病状認識】【がんとともに生きる構え】【後悔のない最期に向かう構え】【生き方を左右する価値観】【厳しい現状を預けられる存在】【前に進む上での強み】であり、『最期まで自分らしく生きるための力』であることが明らかになった。

がん看護専門看護師が実践している再発または転移を経験したがんサバイバーのストレングスを基盤とした看護援助には、『ストレングスを引き出す支援』『ストレングスを活用する支援』『ストレングスを支える支援』が明らかになった。『ストレングスを引き出す支援』には、【正しい病状認識を得る支援】【価値を見い出す支

援】【これからを生きる構えをつくる支援】【前向きさを引き出す支援』が含まれていた。『ストレングスを活用する支援』には、【望む生き方に即した治療選択を行う支援】【望む生き方を叶える支援』が含まれていた。『ストレングスを支える支援』には、【がんサバイバーを尊重する』が含まれていた。

(3) 今後の課題

本研究では、再発または転移を経験したがんサバイバーのストレングスを発揮した生き方を明らかにし、さらにがん看護専門看護師のストレングスを基盤とした看護援助方法の実態を明らかにした。この結果を基に、臨床現場で活用できるように、ストレングスを基盤とした看護援助方法を開発し、介入研究へと進めていく必要があると考える。

また、がんサバイバーのストレングスの発揮状況やストレングスを基盤とした看護援助の評価に役立てることができるストレングス尺度の開発を行う予定である。

5. 主な発表論文等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩本 真紀 (IWAMOTO, Maki)

香川県立保健医療大学・保健医療学部・講師

研究者番号：80314920

(2) 研究分担者

藤田 佐和 (Fujita, Sawa)

高知県立大学・看護学部・教授

研究者番号：80199322